

鳥居龍蔵記念博物館 NEWS LETTER

1

2022. Winter
Tokushima Prefectural
Torii Ryuzo
Memorial Museum

鳥居龍蔵は、1870（明治3）年に現在の徳島市東船場町で生まれた、人類学・民族学・考古学の研究者です。日本国内はもとより、台湾、中国西南部、内モンゴル・中国東北部、朝鮮半島、シベリア、サハリン、千島列島など、東アジア各地の様々な民族を対象に、学際的な方法を駆使して調査・研究を行いました。徳島県立鳥居龍蔵記念博物館には、彼の遺した約7万点にも及ぶ膨大な資料群が、保管されています。



今季の逸品 遼代の施釉瓦

鳥居龍蔵記念博物館は、鳥居が遼^{りょう}の遺跡で採集した屋根瓦や塼^{せん}（レンガ）を多数所蔵しています。遼代には緑が高貴な色とされ、宮城や陵（皇帝や皇后などの墓）に緑釉を施した瓦が多用されました。当館が所蔵する瓦の多くも、こうした緑釉瓦^{りょくゆう}です。往時の遼文化の隆盛を思わせる貴重な資料といえるでしょう。

（岡本 治代）

資料で たどる、鳥居龍蔵の学問と生涯

フィールド 第1章 少年、野へ



少年時代の鳥居龍蔵

はじめ多趣味な大人が多く、龍蔵は、彼らから影響を受けながら、浮世絵や人形芝居、軍記物語などを愛好する、一風変わった「ませた」少年として育ちました。下の写真は、彼が少年時代に所持していたと思われる錦絵や軍記物語です。晩年に記した自叙伝『ある老学徒の手記』（以下、『手記』）にも、幼少期に軍記物語を愛好したとあるように、鳥居少年の嗜好が偲ばれる資料です。



富嶽三十六景



新町川と船場界限



真書太閤記

明治の初めに、とある少年をとらえた写真が鳥居龍蔵記念博物館に保管されています。山高帽にジャケットを羽織り、ポーズをとる姿からは、「鄙にはまれな」垢抜けた雰囲気がありますが、これが、11歳時の鳥居龍蔵です。

龍蔵は、1870（明治3）年、徳島市の中心部、東船場1丁目で産声をあげました。生家は煙草を扱う問屋で、江戸時代後期に撫養から徳島に進出し、祖父である鳥居新助の代には、城下で屈指の本店となり、下の絵画に見られる新町橋のたもとに店を構えていました。彼は次男として誕生しましたが、病弱な兄に代わって跡取り息子として、なに不自由なく育てられたのです。

生家の周辺に

は、奉公人をは

さて、龍蔵の経歴上の特徴に、学校教育をほとんど受けていないことがよく挙げられます。『手記』に「学校はなんだか落ち着かず、いつも逃げて帰っていた」とあるように、裕福な家に生まれ、小学校入学以前に独自の学習スタイルを身につけていた少年にとって、学校の画一的な一斉授業は苦痛であったのかもしれませんが。

そこでここでは、当館に残された龍蔵の小学校卒業証書を取り上げ、小学校中途退学のいきさつを確認してみましょう。『手記』の述懐によると、1～2年生の間に2回落第し退学したとあります。しかし写真に掲げた証書は小学5年生時のもので（当時は半年に一度証書が交付



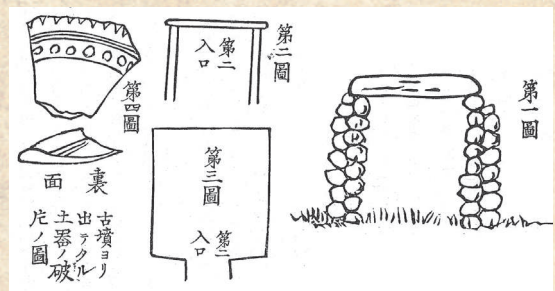
新町小学校の卒業証書（小学5年生時）

されていました）、述懐とはつじつまが合いません。またこれ以外にも、彼の回顧や履歴書には『手記』と異なる記述が見られ、小学校を離れる時期は定かではありませんが、おそらく学校嫌いであったことは一貫していたのでしょう。小学校で学校教育と決別する際の龍蔵の心境を『手記』は次のように伝えています。曰く、「ある教師は私に、学校卒業証を所持しないものは生活できないと云われたから、私はこれに反対し、むしろ家庭にあつて静かに勉強して自己を研磨して学問する方が勝っていると、自己説を主張した」と。少年は学校教育からのドロップアウトに際し、

一見「わがまま」とも受け取れる強弁^{ろう}を弄したわけですが、その後の彼の生き様は、この発言を自ら証明していくものとなりました。

それから約10年後、小学校を途中で退学した少年は、二十歳で単身上京し、以後、東京帝国大学を拠点に本格的な研究活動を展開しはじめます。飛躍的な発展といえますが、その背景には何があったのでしょうか。上京までの十代の活動に注目し、この謎を解き明かしましょう。

右のスケッチは、1887（明治20）年に『東京人類学会報告』第2巻第17号に掲載された、龍蔵17歳時の論文「阿波国二古墳ノ記」に添付された挿図です。後に徳島県の国指定史跡第1号となる「段の塚穴」を調査したときのものですが、いかがでしょうか。一見ラフで稚拙な印象を禁じ得ませんが、報告を詳細に検討すると、横穴式石室の基本構造を押さえた科学的な観察がなされていることに気づきます。この調査報告を皮切りに、多くの論考が立て続けに学会誌に掲載されていくのです。これらの研究に共通するのは、緻密な現地調査にもとづく検証です。「わたしは見た」「わたしは描いた」「これがその記録です」。地道な実見にもとづく報告は、抗しがたい説得力を持ちます。そして龍蔵はその取り組みを、人生でもっとも多感で柔軟性に富む十代に実行し、将来に向けてのステップを得たのです。



段の塚穴調査時のスケッチ

（石井伸夫）



段の塚穴太鼓塚（左側）と柵塚（右側）



太鼓塚石室入り口

ゆかりの地 今昔 1

徳島県内各地にある鳥居龍蔵の「ゆかりの地」について、過去の資料と現在の様子を対比させながら、わかりやすく紹介します。今回は、徳島市寺町に所在する2ヶ所の「ゆかりの地」について紹介します。

まず最初は、錦竜水きんりょうすいです（写真1・2）。徳島市の眉山山麓びざんさんろくにある湧水群のひとつとして有名なもので、古くから飲料水として利用されています。写真1は鳥居の師で東京帝国大学教授の坪井正五郎つばいしゅうごろう（1863 - 1913）が徳島を訪れた際の記念写真です。写真右端が、坪井、その隣が鳥居です。鳥居の自叙伝『ある老学徒の手記』（1953年刊）によれば、1897（明治30）年に撮影された実業懇話会の人々との記念写真で、撮影者は、近年まで徳島市で営業していた立木写真館の当時の主人、立木信造氏であったといわれています。

『東京人類学雑誌』第145号によれば、坪井は9月24日に徳島市の実業懇話会で、翌25日には四国人類学会でそれぞれ講演を行ったとあり、写真はその折のものと思われる。現在、錦竜水の建物は、写真2のように変わりましたが、今も歴史的な名水として多くの人々に利用されています。



写真1 坪井正五郎来訪時の記念写真



写真2 現在の錦龍水



写真3 滝薬師本堂前の石柱

もう1箇所は、同じ徳島市の寺町にある、滝薬師本堂前の石段にある石柱（写真3）です。銘を読むと「積劫障雲蕩一瞻 鳥屋新助」とあります。これと対になる石柱は、火災で傷んだため文字は読めなくなっています。石柱は、鳥居の祖父である鳥居新助が寄進したものです。高さが2m以上あり、その大きさに驚かされます。石柱は、当時の鳥居の生家の盛況を偲ばせるものとなっています。

（下田順一）

資料整理 の最前線

ここでは、徳島県立鳥居龍蔵記念博物館の館蔵資料整理作業の成果のなかから、未公開の資料を中心に紹介していきます。第1回は、鳥居の青年期に行われた台湾での調査に焦点をあてます。

1897(明治30)年10月末から12月末までの間、鳥居は、台湾南東の孤島である紅頭嶼(現 蘭嶼)^{こうとうしよ らんしよ}で日本人の学者として初めて人類学的な調査を行いました。その調査内容は、原住民族の人々の生活習慣、言語、建物様式など多岐にわたります。今回はそれらのなかから、鳥居が紅頭嶼で見た集落や海岸について紹介します。



写真1 紅頭嶼の集落

写真2は、集落の方から、海岸を見下ろした風景です。海岸には10艘以上の船が並べられています。これらの船は、紅頭嶼のみで使われる独特な形をしています。鳥居は『紅頭嶼土俗調査報告』(1902年刊)に、原住民族はこれを「タタラ Tatará」と呼び、板を組み合わせて作り上げるとしています。また、フィールドノートには、1人乗りから、最大12人乗りまで色々な種類があったと記録しています。主として、トビウオやシイラ漁に使われる船です。

写真3は、伝統的な建物の建つ敷地から海岸を見下ろして撮影しています。建物がある平坦部から一段下がった所に植物が栽培されています。鳥居はこれを原住民族の人々が常食としている里芋(正確にはタロイモ)であるとし、その調理方法は水煮であったと報告しています。

(下田順一)

写真1は、集落から山の方に向かって撮影されたものです。紅頭嶼は平地が狭いため、斜面を削り石垣をつけて建物を建てています。手前に主屋の屋根が見えますが、その奥に、別の主屋と倉庫などのセットとなる伝統的な建物が4つ程度見えます。鳥居が調査したこの様な集落は、建て替えが進むなかで、同様の姿を見ることができなくなっており、写真は、貴重な民族資料といえます。



写真2 紅頭嶼の海岸



写真3 紅頭嶼の建物と水田

鳥居龍蔵に学ぶ「地域学」

鳥居龍蔵は、東アジア全域を踏査したことで知られますが、地元である徳島県内にも多くの足跡を残しています。これらのなかには、学術的に価値のある遺跡などが数多くあり、私たちの生活に溶け込んでいます。この連載では、鳥居龍蔵の調査を切り口に、県内の歴史文化遺産を紹介していきます。今回は徳島市の城山貝塚について紹介します。

城山貝塚は、徳島中央公園の城山の麓（徳島城跡）にあり、1922（大正11）年に鳥居龍蔵たちによって発見されました。山麓の東南には「文学博士鳥居龍蔵先生記念碑」がありますが、それは、城山貝塚と鳥居龍蔵に大きな関わりがあることを物語っています。

城山貝塚が発見されるまでは「徳島県内の遺跡からは縄文土器は出土しない。つまり、徳島の石器時代は、弥生時代以降のものである」と考えられていました。そのような中、徳島に帰郷し、県内の遺跡調査をしていた鳥居は「城山の岩角が突起して道路に突き出している箇所から、多数の貝類が出た」という情報を得ます。そして、鳥居の指揮のもと即席の発掘調査が行われました。それは、現在の徳島城博物館のすぐ北にあたる場所でした。



発掘当時の城山1号貝塚

発掘を進める中で、貝殻の堆積層から、縄文土器の破片が出てきたことに、鳥居達は仰天します。ここは、後に1号貝塚と呼ばれるようになりますが、その直後に城山東の麓で2号貝塚が、また、1号と2号の間地点で3号貝塚が発見され、ともに縄文土器が出土しました。岩陰の2号貝塚は、獣骨や魚骨に加えて、人骨が出土していることが特徴として挙げられます。一方、洞窟で確認された3号貝塚は、城山貝塚を代表する遺構で、縄文土器と弥生土器が同時に出土したことで知られます。

これらの発見は、地元紙に連日大きく取り上げられ、徳島県民の関心を集めました。発掘現場には、モラエスや喜田貞吉などの学識者も見学に訪れています。また、県内初の本格的な発掘調査が行われたことから、城山貝塚の発見は、徳島の考古学研究のターニングポイントにもなりました。そういった意味で、鳥居龍蔵らによる城山貝塚の発見は、徳島の歴史において大きな意義を持っています。

（小倉和也）

発掘を進める中で、貝殻の堆積層から、縄文土器の破片が出てきたことに、鳥居達は仰天します。ここは、後に1号貝塚と呼ばれるようになりますが、その直後に城山東の麓で2号貝塚が、また、1号と2号の間地点で3号貝塚が発見され、ともに縄文土器が出土しました。岩陰の2号貝塚は、獣骨や魚骨に加えて、人骨が出土していることが特



城山3号貝塚の現況

龍蔵を巡る人々 — 碩学と社会の インターフェイス —

鳥居龍蔵は小学校を途中で退学し、独学で自身の学問を切り拓いたことで知られます。しかし、その活動は決して社会から孤立したものではありませんでした。このコーナーでは、独自の学問世界を築いた「知の巨人」と社会を繋ぐインターフェイス（接点）となった人々を紹介していきます。第1回は、鳥居の東京での活動の「起点」となった小杉榎邨の紹介からはじめたいと思います。

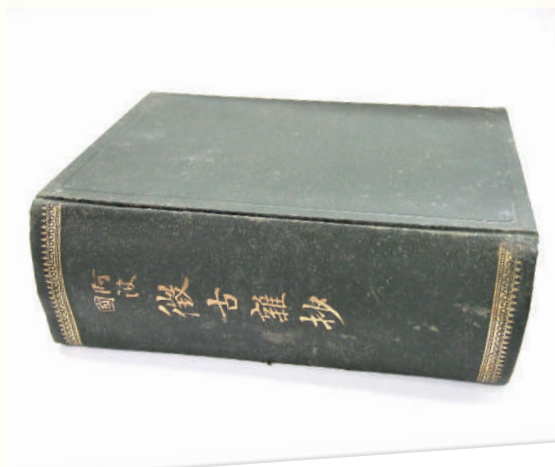


小杉榎邨肖像

小杉榎邨（1835～1910年）は、江戸末期に徳島で生まれ、1874（明治7）年以降は東京に拠点を移し、明治の終わりまで活躍した国学者です。東北から九州まで、全国の旧家や寺社などが所蔵する古文書やその他の資料を集成した『ちようこぎつしよう徴古雑抄』の編者として知られています。また、彼の没後、喜田貞吉ら後進の学者が『徴古雑抄』をもとに阿波国関連の史料をまとめた『阿波国徴古雑抄』は、阿波の歴史を調べる際の必須文献となっています。

龍蔵との出会いは、彼の人柄を偲ばせるものでした。1890（明治23）年、東京帝国大学人類学教室主任の坪井正五郎を訪ねて上京したものの、坪井のフランス留学により行く当てのなくなった龍蔵に住居を世話したほか、東京国立博物館の資料を閲覧させ、歴史学、考古学に関する薫陶を授けるなど、文字通り龍蔵の東京での修学の「起点」の役を果たしたのです。また後年には、龍蔵と妻きみ子を引き合わせ、結婚の際には、坪井正五郎とともに媒酌人を務めたことでも知られます。榎邨は、鳥居に対して終生「郷党の先学」として接し、学問の道に誘ったのです。

（石井伸夫）



阿波国徴古雑抄



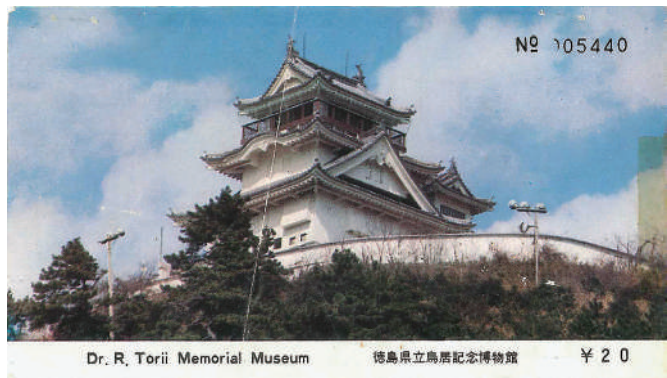
龍蔵ときみ子の結婚式、後列左端が榎邨、その右が坪井

鳥居龍蔵研究に思う

— 鳥居龍蔵と城山貝塚 —

元鳥居龍蔵記念博物館長
湯浅 利彦

私が初めて鳥居記念館（旧館）を訪ねたのは市場中学校（阿波市）2年生のときです。城郭建築に惹かれて1971（昭和46）年8月に鳴門まで自転車で走りました。その後、岸積さんの『鳥居龍蔵伝』（1966年、徳島郷土双書）を買って読み、城山貝塚も訪ねました。当時のノートには「大正11年人類博士鳥居龍蔵が発見した。一～三号まで貝塚がある。発掘物は弥生式土器、アイヌ式土器…」などと記しています。



鳥居記念館チケット

30歳から私は埋蔵文化財調査に従事し、最初に担当した稲持遺跡（東みよし町）で縄文土器が出土しました。当時県内に縄文遺跡は数少なく、先輩に勧められ、1988（昭和63）年4月に思い切って鳥居記念館の鳥居龍次郎さん（龍蔵の次男）を訪ねました。現在も鳥居龍蔵記念博物館で展示されている城山貝塚の縄文土器を手にとって見せてもらいました。龍次郎さんは終始ご機嫌で、龍蔵の偉大さと、それを世間が理解していないことを熱く語ってくれました。

2006（平成18）年、天羽利夫さんが「鳥居龍蔵を語る会」を立ち上げたので、参加して様々なことを学びました。2009年に笠井新也「城山貝塚発掘記」の翻刻と解題を任せてもらい、その成果の一部は2011年9月に語る会で発表させてもらいました。



岩窟の発掘（鳥居1923）

私は2016（平成28）年から鳥居龍蔵記念博物館に勤めることになり、退職までの2年間で謎の多い城山貝塚の出土資料を調査・報告しようと企てました。資料を所蔵する東京大学総合研究博物館の諏訪元さんのご協力を得て、関係資料の実測と撮影をしました。また県立図書館所蔵の森敬介資料・前田正一資料、鳥居龍蔵記念博物館所蔵の井上達三資料などを加え調査過程を復元し、未刊の発掘調査報告書を作るつもりで『鳥居龍蔵記念博物館研究報告』3・4号にまとめました。出土人骨は、東京大学の佐宗亜衣子さんたちが分析してくれました。

その後、龍蔵の「有史以前論」における城山貝塚の位置づけや、徳島の考古学史、復活した徳島人類学会など、視点を変えながら龍蔵と徳島を分析しています。龍蔵がもつ徳島とくに城山への思い、徳島がもつ龍蔵への思いが交差するのがこの城山貝塚であり、私も鳥居龍蔵の理解を深める起点となっています。

鳥居龍蔵記念博物館 NEWS LETTER No.1

発行年月日 2022年1月20日

編集・発行 徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山（文化の森総合公園内）

TEL 088-668-2544 FAX 088-668-7197

<http://www.torii-museum.bunmori.tokushima.jp>